〔古今著聞集十六興言利口〕北院御室、或かた夕ぐれに、御前に人も候はで、たゞ一所御念誦して、御座有けるに、いづこよりか來りつらん、大床の邊より、世におそろしげなる白髮のうば參りたりけり、またすをやをら引あげて、ゑみ〳〵として、いかにおそろしく思召候らんなど申て、きら〳〵とわらひて候けり、御室の御心の内をしはかるべし、されば共少もさはがせ給はで、何ものぞととはせ給ければ、御返事をば申さで、たゞきら〳〵とのみ笑けり、〇略下

〔書言字考節用集八言辭〕解頤（トクワイトガイフ）使人笑曰解頤出漢書

〔新猿樂記〕都猿樂之態、嗚嘻之詞、莫不斷腹解頤者也、

〔玉海〕文治五年正月一日壬辰、二位中將還來、〇略中又云、親宗勸御酒勅使之間、進階間東頭、萬人解頤云々、

〔竹取物語〕大納言〇略中家に少殘りたりける物どもは、龍の玉をとらぬものどもにたびつ、是を聞て、はなれ給ひしもとの上は、はらをきりてわらひ給ふ、

〔續古事談二臣節〕松殿〇藤原基房御時、内ノ女房宇治ニ參リテアソビケルニ、和歌會アリケレバ、人々アマタ參ケルニ、刑部卿重家朝臣、アニヲトヽ清輔季經ナド、一車ニテ參ケル、〇略中アニヲトヽ三人、コノ次第ヲカタリタルニゾ、其座ノ人々ハラヲキリテワラヒタリケル、一座ノ比興ナリ、

〔名物六帖人事四性行笑啼〕捧腹（ハラヲカヽヘル）史日者傳、司馬季主捧腹大笑、〇腹不能錄、可爲進階者助中捧腹上

〔倭訓栞中編二十波〕はらをかゝゆ　捧腹の義也、笑に堪ざる意也、

〔俚言集覽波〕腹筋をよる　おかしき事、鷹筑波、暑き時分の能のおかしゝといふ句に早苗とる小田の腹筋切もぐさ

腹の皮をよる　腹筋をヨルとも云、籾井家日記、腹がよれる、

〔俚言集覽閉〕臍が西國する　甚しく嘲り笑ふを云